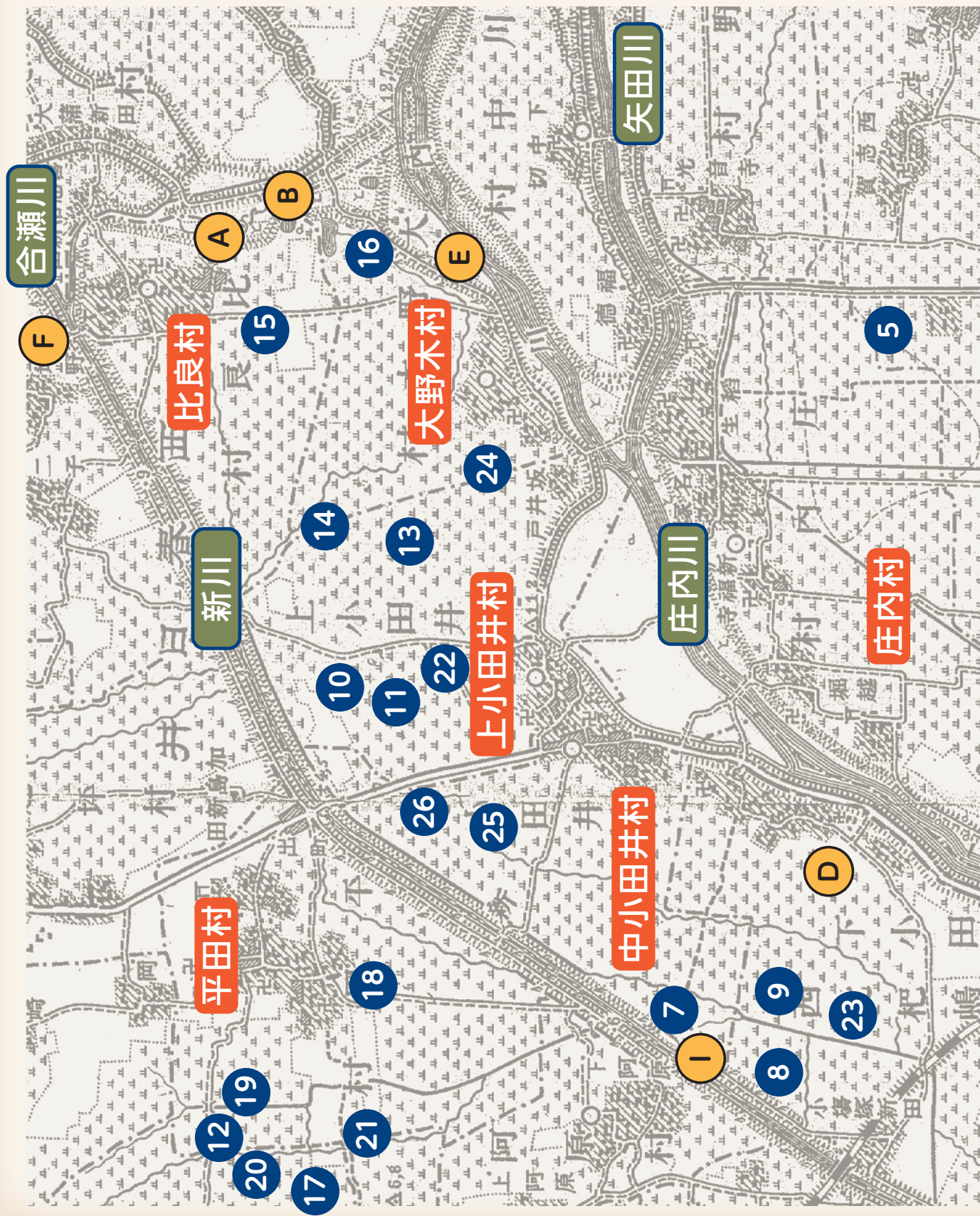




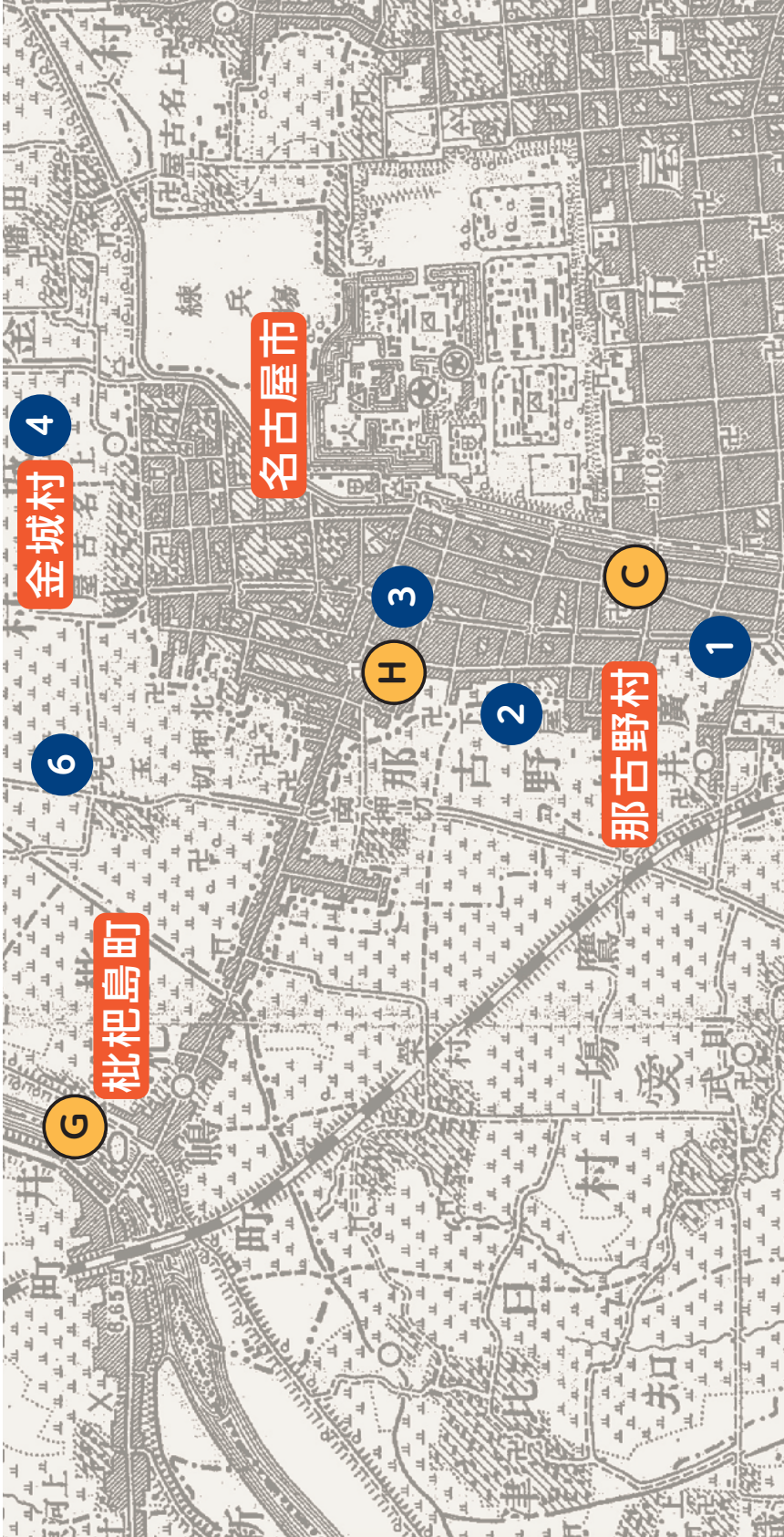
西区 歴史に学ぶ防災マップ



西区の大半は、二千年ほど前までに庄内川などが運んできた土砂の堆積によって生じた平野で構成されています。そのため、河川の影響を受けやすく、歴史的に多くの水害に見舞われてきました。今回、近世以降で西区に甚大な被害をもたらした災害や、それに対し時の為政者や住民が行ってきた治水施策、災害に関係する地名についてまとめました。これを機に、自分が住んでいる土地がどのような場所なのかを見つめ直し、想定される災害に備えましょう。

マップの見方・要点

- ・マップは明治28年の村憲を示したもので、当時は区域に10の自治体がありました。
- ・地名から読み解く西区では、昔の地形や土地の成り立ちが推測できます。



地名から読み解く西区

- 1 那古野**
なごや言葉で「なご」は霧という意味があり、この一帯が霧深い湿地であったため。
- 2 隅田町**
低地であり、大雨が降るとたまち池のようなので西北の隅の方にはかり家々が立ち並んだため。
- 3 幅下**
幅には窪のふちという意味があり、堀川を挟んで高くなっている台地の下にあるため。
- 4 北浜 5 貝田町**
近くから貝塚も見つっており、古来は浜であったことが想定される。
- 6 泥町**
霜解けや雨の降った後などはぬかるむことが多い土地であったため。
- 7 芦生 8 東菰原 9 西菰原**
芦(あし)・菰(まこも)とは湿地に生える植物。

- 10 北之川 11 南之川 12 流**
かつて川があったことが想起される。
- 13 波池 14 由池 15 間之池 16 大澤池 17 鴨池 18 長池 19 蓮池**
かつて池があったことが想起される。
- 20 浮野**
浮くの言葉から泥深い土地であったといわれている。
かつて船着天神と呼ばれる天神社があり、船が必要な土地であったと考えられる。
- 21 中沼町 22 中浦 23 海廻り**
沼・浦・海がつく地名は水辺に近いことを指す。
- 24 中島 25 島落 26 茨島**
島という名前がつく地名の場所は周辺より少し高くなっている土地で、大雨の際にそこだけが水に浸からず、島のように見えたことから名づけられたことが多い。

この地図は、国土地理院図の承認を得て、同院発行の5万分1地形図を複製したものである。(承認番号 平28情産、第1242号)
また、第三者がさらに複製する場合には、国土地理院の長の承認を得なければならない。



西区 歴史に学ぶ防災マップ 解説編

解説編の見方・要点

・写真や絵を通して、過去の災害の被害がわかります。・被災当時の貴重な記憶を伝えるため、体験談を掲載しました。

風水害

B. 明応3年の洪水(蛇池などが成立)

応永の築堤により数十年間は洪水による被害を免れていたようですが、この時比良の堤防が決壊し、大きな被害が出ました。このころの洪水で堤防を越えた水が堤防内に留まってしまったことが、蛇池をはじめとする比良周辺の池の起こりだったようです。



現在の蛇池

D. 安永8年の洪水

味鋤・大野木・比良の堤防が決壊し、小牧や五条川のあたりまで、一面海のような様相になりました。安永8年から数年間は、度々洪水が発生し、多大な被害が発生したため、尾張藩にそれまでにない規模の治水工事である新川開削を決意させることとなりました。

H. 伊勢湾台風

日本の災害史上最大の風水害と言える巨大な規模であって、死者・行方不明5,098人、住家の流失・全壊40,862戸、半壊113,068戸、浸水363,611戸などの激甚な被害をもたらしました。



安永8年洪水の図(個人蔵)

I. 東海豪雨

平成12年9月11日から12日にかけて東海地方を襲った記録的な集中豪雨でした。一時間で最大約100ミリという強烈な豪雨により、新川が決壊し、西区だけで住家の全壊が4棟、半壊が84棟、床上浸水が2,452棟、床下浸水が4,787棟という多大な被害が発生しました。



名鉄中小田井駅周辺



ボートでの救出作業



大量に発生したごみ



新川決壊箇所

G. 濃尾地震

西区内では震度6~7という大きな揺れを観測した直下型地震でした。全国での死者は7,273名、全壊家屋は142,177戸、建物ばかりでなく交通機関や河川の堤防などにも甚大な被害が及びました。噴砂(液状化)も多発していたそうです。当時の枇杷島橋も崩壊してしまいました。



枇杷島橋崩壊(名古屋博物館提供)

地震

C. 元禄13年の大火

元禄13年(1700年)の大火で1600軒余りが焼失してしまいました。そのような火災の被害を抑えるために、中橋から五条橋までの通りの東側に石垣の上に土蔵を建て、延焼を防ぐ防火壁の機能を持たせることを奨励したことから、現在の四間道地区のような土蔵造りの並ぶ街並みが形成されたとされています。また、その際、道幅を4間(約7メートル)に拡張したことが、四間道と呼ばれる由来の一つといわれています。



現在の四間道(西区役所地域力推進室提供)

火災

体験談 東海豪雨

東海豪雨を語り継ぐ会代表 石田氏(中小田井在住)

東海豪雨のときは胡弓やギターは何とか二階に移すことができたので、無事だったが、車や演奏に使う照明器具は水に浸かってしまい、壊れてしまった。一月ほどで、町中にあふれかえっていたごみは片づけられ、一見すると、豪雨の前と変わらないように見えるようにはなったが、家の中に足を踏み入ると、畳ははがれたままで、壁も崩れているなど、精神的・経済的負担はとても重かった。「こんなにひどい被害にあうとは思ってもみなかった。大雨の怖さは昔から変わらないのだ。」と思い知らされた。僕の曲で水害の怖さや小田井に住む人が抱えてきた歴史を伝えていければと思う。

東海豪雨の際、避難した人たちから寄せられた声 〔「西区 100 年のあゆみ」より〕

「蒸し暑く、寝苦しい。」 「工場が水没したため、仕事をもう一度軌道に乗せられるか不安だ。」
「いつ水が引くのかなど、浸水状況の情報がほしい。」 「留守宅に泥棒が入らないか心配だ。」
「仮設住宅がほしい。」

年 表

年 代	主なできごと
1400頃	A 応永の築堤
1495	B 明応3年の洪水
1701	C 元禄13年の大火
1779	D 安永8年の洪水
1783	E 御冥加普請(大野木堤)
1784	F 新川開削
1891	G 濃尾地震
1959	H 伊勢湾台風
2000	I 東海豪雨

治 水

A. 応永の築堤

応永年間(1394年から1427年)に尾張国守護(斯波氏)によって合瀬川右岸(現在の蛇池周辺)に堤防が築かれたといわれています。



御冥加普請の図(名古屋市博物館提供)



現在の蛇池周辺の堤防の様子 桜の名所として有名

E. 御冥加普請(大野木堤)

天明3(1783)年秋、大雨により庄内川が氾濫し、大野木村の堤防が決壊しかけたが、藩主宗睦が熱田神宮へ祈願したところ、晴天となりました。このご恩に報いるために、押切村の庄屋大助と一東利助が発起人となって普請費用を集め、同年十二月に大野木の堤防工事を行ったといわれています。この工事には約2,000人もの人々が参加したとされています。



現在の洗堰の様子(庄内川河川事務所提供)



東海豪雨の際の洗堰の様子

F. 新川開削

安永8年の大洪水(D)から毎年のように洪水が続いたため、当時の尾張藩主徳川宗睦は、大規模な治水工事の施工を命じました。それまで庄内川に流れ込んでいた合瀬川や大山川を五条川などに合流させ、伊勢湾まで約20kmにおよぶ川を掘ろうというものでした。また、庄内川右岸堤を一部低くし、洗堰とし、庄内川増水際には庄内川を分流し、洗堰を通して新川に流れるようにしました。

参考資料など

「愛知県災害誌」愛知県総務部消防防災課、「名古屋市史」名古屋市、「なごやの町名」名古屋市計画局、「地震体験記録集関東大地震南海地震・三河地震」愛知県総務部消防防災課、「庄内川流域史」中部地方建設局庄内川工事事務所、「比良のいたち」小川猛、「平成12年9月東海豪雨水害に関する記録」名古屋市西区役所まちづくり推進部、「東海豪雨水害に関する記録」名古屋市消防局防災部防災課、「西区の歴史」山田寂峯、「四間道と有松一名古屋市伝統的町並保全基礎調査―」歴史的環境研究会、「小田井地区一名古屋市歴史的景観地区調査報告―」歴史的環境研究会、「庄内創立100周年記念」名古屋市立庄内小学校、「御冥加普請の記并図」一東実雄(著)新川みのじ会(編)

※マップの中の説明の無い写真は名古屋市が保有しています。

発行/問合せ先 名古屋市西区役所区政部総務課 名古屋市西区花の木二丁目18番1号 ☎052-523-4513 平成29年3月発行

この印刷物は古紙パルプを含む再生紙を使用しています。